

行應抄

188.4

E 83g

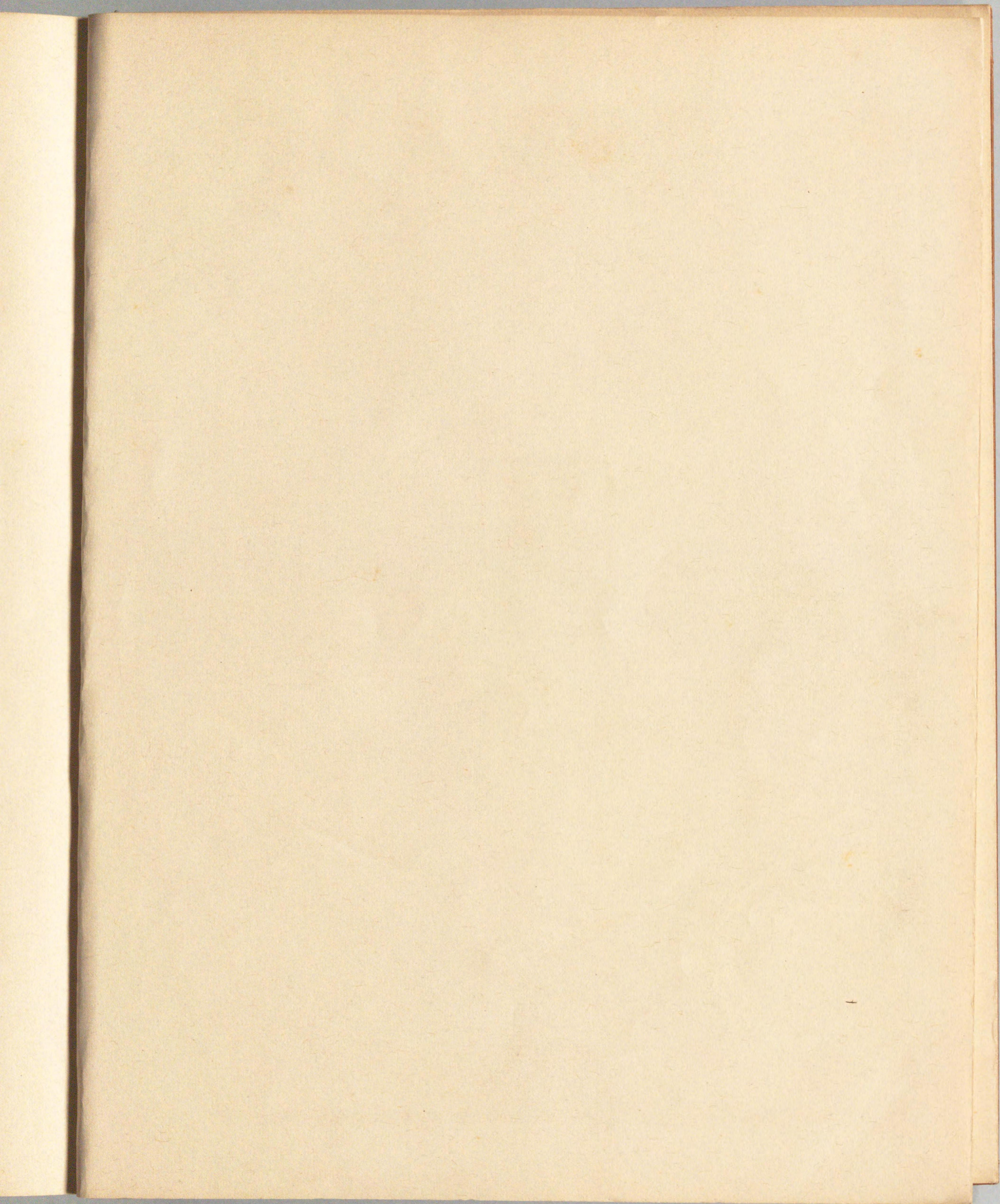
S



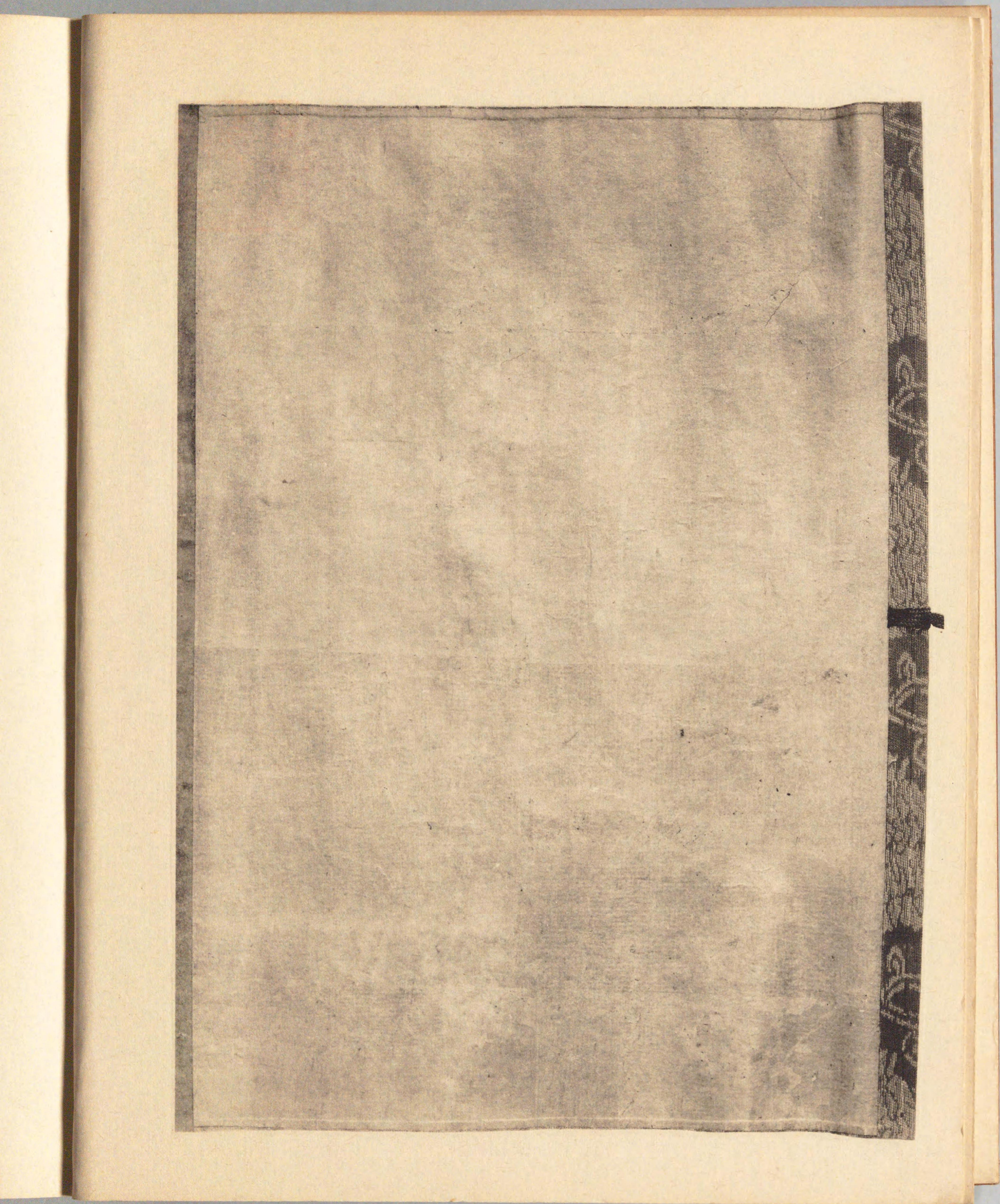
216542

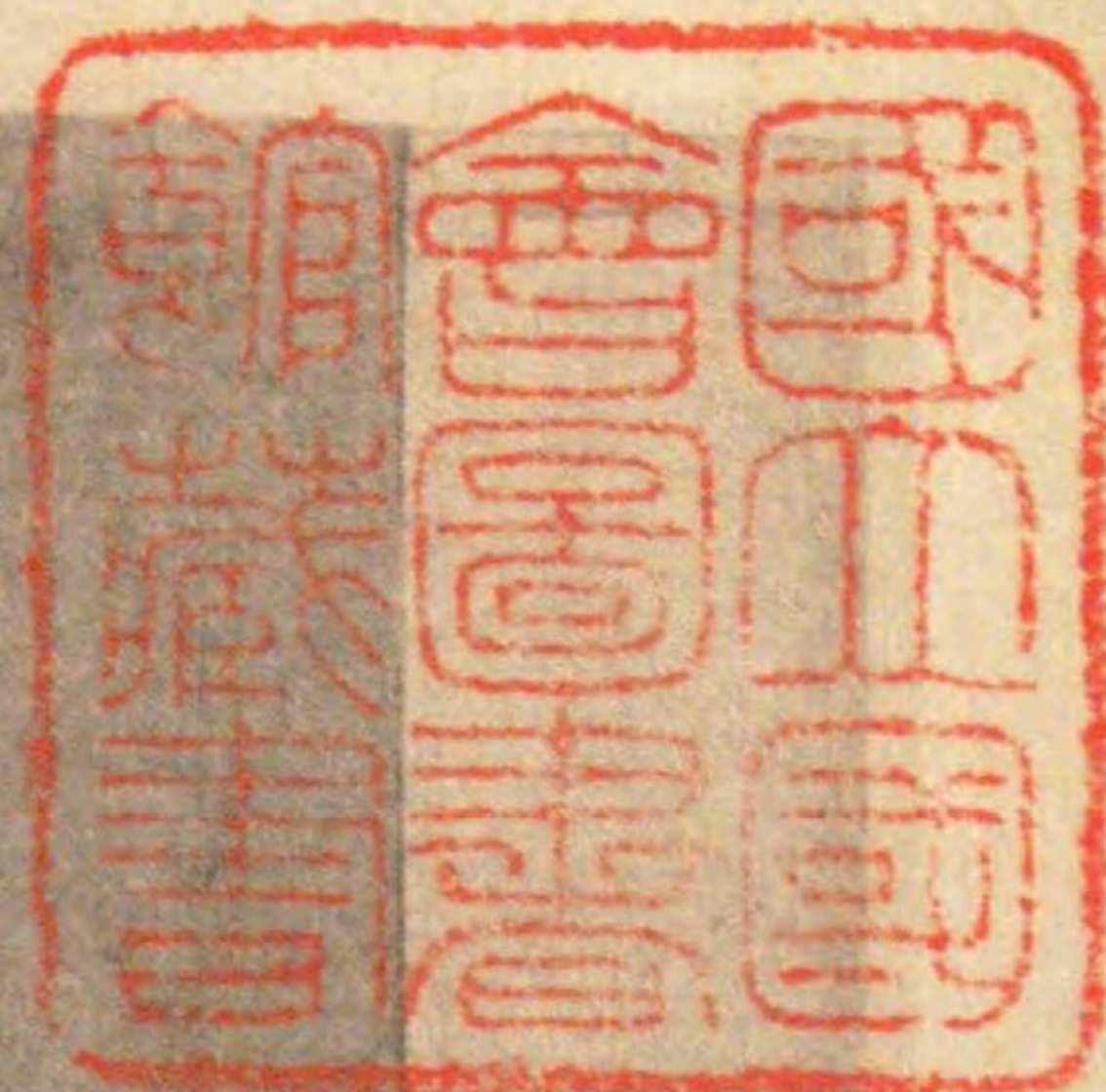
188.4 E83g











四月十五日和尚發京向大宰府

信達前曼以无便服寄任紙

三年七月十五日上船到值嘉山泊島浦八月九日放舟

過海十五日午時着大唐嶺南道福淵連江縣界

即大唐大中七年也已上傳文也 智勸私抄入之

天台大師 隋開皇十七年丁巳入窠

日本仁壽三年也

山美院大師 唐第十七主宣宗皇帝大中七年美入唐天台大師三首五十七卷也

自日本香衡元年甲戌至于遠久五年甲寅三百四十八年

都合五百九十八年款 智勸私抄

天中七年

十一月

十九日從屈家

屈第十二此天台國清寺清觀庵主家兄也

發到會巖縣安寧

宿當日網維報縣

廿四日出絹兩疋助修天台

七五十七

忘也

廿六日上開元寺略看網維寺主明秀具狀報潮此開

元寺者本龍興寺基貞元年未陸淳身中屈天台

遂和尚於此寺講上觀日本國比叡大師從明既轉

剎此臨海縣至止龍興寺參見知上聽讀上觀

正州地也於寺已後於龍興寺此起用夫不置龍

正州地也於寺已後於龍興寺此起用夫不置龍

正州地也折寺已後於龍興寺
山起用
光不置龍

正北地也折寺已後於龍興寺

興宗之門巽隅有山名小湖山
踰臨江當日相者德

安量道真拉胞房中有瑞和上弟子季臯
清翰

僧正弟子知達兩和尚纔見喜歡非甚安存

達和尚者此与口折大和尚貞元年未國滿寺受

具足戒同及座一列達為上座於法門中皆足伯

殊

十二月

九日五更乘潮上發行元璋關梨相領入舡一切旬當

都五箇日從溪而上水淺石多非常難行此山溪者

天台大師放生之地 在後貞觀儀鳳之中勅下禁

斷不教演捕永為放生之地折寺已後却如往時

滬梁滿江溪放生過億萬 今上御宇佛日再中僧徒

二一若水名也

二
若水名也

知歸俗再聞鐘新量國清興
大師教惟幼清觀
苗禪伯道心堅固慈悲廣深頌鉢柱錫從五峯出
尋到長安進狀捉一輿奏請鴻鍾人願天從感得天
恩使蒙賜給在神策鍾復得一本大藏經教論得十
里松門免脫百姓斫伐放生之池再歸舊創梁葛
業亦改惡曰師願如新功德難訖一大師之願也二
兩師之妙討不可思議

十一日食時日本田學圓載差行者送書來到

十二日晚間望國清寺及禪林山大師墳邊松樹合掌
願去唐興縣三五里宿怪溪上

十三日應後國清寺都師元唐俗姓周到來相者續後寺
家催十箇老宿後無教來廨宅迎接廨宅相去國

清一
余
免
邪
而
合
心
食

清一十餘里近晚都師共元童
入縣相者

家備十箇老宿後免考來廟定迎接廟定掛去國
清一十餘里近晚都師共元童
入縣相者

清一十餘里近晚都師共元童
入縣相者

官人劉長官曰病不出見住持了便上國清於黃

昏間到寺禮拜 大師歎美相者無安置西院東頭

老 居此貞元年未講天台教大德 文舉老宿弟

清觀兩座主房也 西院老宿 貞元

二國清寺知事上座律範得家江淮兩浙

八 圓融大師貞元年 不國清寺受具戒時

一 護師并書戒條其書跡是在日本國上都迄

曆寺藏人住跡駐風範猶新緣於法親彼此相重

十四日卯辰之間上晨朝上堂講經時札文但寫十二

為并五悔不寫佛名 卯辰之間上堂報小食之後

下堂欲歸房忽然起心曰載不久合來不用入房且防

下堂欲歸房忽然起心曰載不久合來不用入房且防

復待他未思已行到南門者望橋南松門上橋者寺門前橋也
有師騎馬來到橋南頭下馬下是苗學圓載并
也此便出門迎接橋北相者孔拜流浚相喜珍雅如此載
不多悅顏色黑漆內情不暢疏却念多奇若本鄉
人无不識異國相見親於骨肉况乎舊時同寺比座
今思世間似无本情多奇相告歸院東道西說无有
有味說導我在唐國已經多年想忘却日本語都
不語話入夜說導送無与本國太政官不因王勅不令
人來臨日太好載日有人說珍將來五千兩金珍
日金有何限

十五日 唐後曰珍變將回載到大師堂前從袖抽出勅

十五日 唐後曰珍變將回載到大師堂前從袖抽出勅

十五日 磨後曰詠爰將回載到大師堂前從袖袖出勅

十五日 磨後曰詠爰將回載到大師堂前從袖袖出勅

綜過与回載當時詠向他說詠在本國志力出得

此條其時詠自藤相公詠可中蒙恩到大唐國見留學

元時可相送气 相公与間奏賜大法師位條者

相公答曰此可懽好弟子与間奏 四月十五日出上郡

到海京落後差人送此條來今日特以送上愚誠不列

事但為閣梨求大師教擬傳本國將副先師詠更无可

隨喜持此表誠者當時載捧受頂戴喜喜無限礼謝

天台大師拜賀曰詠從此以後口中吐出本國言語不可

盡說自此事次具知此人本性未改歸到房裏更与去

物沙金綿絕博益歡喜曰詠次第載問曰下万年

樂詠曰四十九歲載日不令領來多日取厄事詠路

樂詠曰四十九歲載日不令領來多日取厄事詠路

上有煩天涯地角山已來語得或時曰你對他試問

天台義目曾兀吏接兩三度略如此在後休去更不

談話你心惆悵山宗留學曰何如此貞元年留學

因基佯稱眼疾便歸本國作外州縣綱維知事恥辱

宗德今度曰載見解已余忍辱徒無都元利益既

不及穀山沙彌童子見解况於僧人為之乎載來

山中徑下餘或喚出下万同疏身邊多少金或喚小師偷

問金數

又徒無曰曰載乍見日本人想作惡家會昌三年本

國僧曰修惠運來到此山具知曰載犯尼之事僧道詮和

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

上曰曰修道心多有材學在禪林寺見曰載數出寺舉

此多人入寺遊繼

大中八年

二月初，問笛學曰：載出剡縣，去丹越，溯管去唐興縣一百
八十里。臨叢之時，他執導，我未曾聽法。花徑所以今夏
欲去湖，溯榮閣梨處聽讀。若聽法，臨對他曰：遠來
求法，要在聽讀。而今山中應元誨席，閣梨若果聽
去跡，相與隨喜。又臨向導，聞導越湖，良詣座主誨。

此...
世二
世三
世四
世五
世六
世七
世八
世九
世十
世十一
世十二
世十三
世十四
世十五
世十六
世十七
世十八
世十九
世二十
世二十一
世二十二
世二十三
世二十四
世二十五
世二十六
世二十七
世二十八
世二十九
世三十
世三十一
世三十二
世三十三
世三十四
世三十五
世三十六
世三十七
世三十八
世三十九
世四十
世四十一
世四十二
世四十三
世四十四
世四十五
世四十六
世四十七
世四十八
世四十九
世五十
世五十一
世五十二
世五十三
世五十四
世五十五
世五十六
世五十七
世五十八
世五十九
世六十
世六十一
世六十二
世六十三
世六十四
世六十五
世六十六
世六十七
世六十八
世六十九
世七十
世七十一
世七十二
世七十三
世七十四
世七十五
世七十六
世七十七
世七十八
世七十九
世八十
世八十一
世八十二
世八十三
世八十四
世八十五
世八十六
世八十七
世八十八
世八十九
世九十
世九十一
世九十二
世九十三
世九十四
世九十五
世九十六
世九十七
世九十八
世九十九
世一百

說如法到彼聽讀不得載曰彼僧向前与教文得惠運

十兩人余共他作惡文書毀謗我宗所以彼人路上頻逢

我不相見云云亦又說導彼暫時事人心何定若越湘

近且去聽否載曰此議不惡云云亦勸於他意在勉

學余詩多時在剡中住曾不知越鄉事儀何以彼

語塵去叢願誨法花經百遍每年誦過兩三遍

八日黃昏在國清為上禪林洗浴時祈求大師加被

其夜夢冷塵主下來國清迎取曰瑞將去上方

更有維摩大士作頭陀像擔負曰亦隨路入山是當今

禪林云云住持九日齋後亦領徒入山國清東北名靈芝

大師遺跡者也亦難行宛如巡曆葛坡行十八許里山路地黃

峯巖峻亦難行宛如巡曆葛坡行十八許里山路地黃

陳宣帝為大師造精舍，名修禪寺。隋煬帝後，遠國清
便廢寺，名修禪道場。今名禪林，有其目緣。

三月

十七日洗浴了，方欲登華頂。來夜有夢，并僧來取屈，
十八日早旦，吟座主為導首入山。禪林西北過一峻，舉行
一三里路，傍蒿草滋蕪，樹下有石，名之西道場。即大師居
止之地。從此而行十里，到前，或湖，孟中，美亭子，只有舊
基，曾无屋舍。於此，製庵，允跨四峯。至此地，應後向
華頂。自是過十一峯，到於花頂。則第十二峯，亦到頂。礼
之，光招手之石，及降魔道場。此峰，最秀，出諸峯。殆進于天
舊名天梯山，取有道理也。望見四方，宛如掌中。弥等燒香
歸佛轉，全剛經，尊勝真言等，奉為。大師迴向，敬願
不可具記。

九月

一日從梅橋發上坂中路專飯、後到越前南郭門
之家報棚少時至用瓦寺安量天王院曰戴上簿未
晚同相見便相與看寺中、徒與弄天台座主良語
和尚當日寺家報棚

廿一日始上聽講之次到疏第四卷

手心二月間待載不來時漸、執行路難為仍送書
與載要前叢去載有報書不妨前行、因此請得越前
公驗取二月廿九日進發同行四人

與章要前普去章有執書不知前行巨此請得越相
公驗取二月廿九日進發同行四人

十年五月十七日從獲羽徐押衙宅發

廿三日齋後入用瓦寺相者良諳座主故留教取

衣服兩僧歸店商量而今時契彼院遂換加以同行不

多安樂須今度旦入天台商量了更入寺講說座主

一一當時與法花玄義一部妙藥剌訖各一本廿六卷

弥頂戴礼謝便譯出寺座主送到寺門

大中九年四月廿五日從獲羽徐押衙宅發入上都

閏四月

否。丁滿答云。日何事更來。隨本國師僧來特

尋和尚。和尚喜歡便領將去。青龍寺西南角淨土

院和上房與茶飯。畢便傳語來存問曰。師

廿八日曰。師到青龍寺禮拜。和尚并入道場。隨喜禮

拜。便於院中喫茶飯了。和尚問曰。將去大儀軌抄取

得否。師對曰。不敢自檀。和尚便入灌頂道場開厨。取

本。適與曰。師。又入房坐。略說五六。哩子。及以手與茶。師

隨分記得。將瑜伽本出寺。歸到春明門外高家店。寫

怕他惡人不敢更往。阿闍梨院。其載座至彼。十九日到

城。權下崇仁坊王家店。

六月七日春明門外街家所由問曰。和上何久住店中。不入

城耶。師曰。同伴落後在路未到。待彼人共他入城。准擬

如此。街家曰。和上明日入城去。好若過明日。將報官去。師

曰。爭遲。慶分明朝便入。至八日。且雇驢。擔籠入城。略

到載屢繞入店中。田口曰：覺禪和從街西龍興寺到崇
仁坊相者。鄉人喜歡難說。當日歸寺。更三五日後。夕
將飯食來。供養。其後載臨到街西龍興寺相者。雲居
院至。此新羅和上。心行清直。道心堅固。

七月一日。移龍興寺住淨立院。居院去房。惣是曰覺
周梨氣力不可說也。未安泊之間。不及到青龍寺。在後
臨自德。際到青龍見。和尚之顏色。不知前日。具知賊

衝八月十日下十五日入胎藏灌頂手畫胎藏十月三日入金剛界

灌頂當夜夢。從壇上。諸尊脚足處。下一流白乳。入
曰。弥口至明旦。不向人說。從此以後。和尚一切如法。決疑性
復諸事。惣得。訖。身賊与尔甚作妨難。都不欲得
成就。么暫時取彼他語。恣乱。大德。此么錯處。

成就公暫時取彼他語惱亂大德此公錯處

詳

跡第二遍見 和尚時具知賊事得不知之但盡禮度
和尚感之在後具說 一切事委曲知之跡不敢說和
說導者賊久在剡縣卷婦糶田卷蟹卷兒無心入
城繞見跡來為作鬼賊趁逐入來叵耐之所說甚多
向後諸事一切不教賊知之從天台相見之日至手長安
總有元量事不用具記

十一月五日蒙授傳法灌頂位

大中十年正月日記

天安二年歸朝暫留太宰府而故太政大臣美濃公家
勅作早可入京由兼官符下彼府給糧料驛馬等仍
即入京以貞觀初歸本山再拜地王及先師遺教如故
入京住山

已傳草文

天安二年

十二月

廿六日 使并小師等入城跡獨向海中寺禮拜 故和
尚墳到夜入寺相着寶座主海國梨寄宿

廿七日午後從山寺發日落到上出雲寺宿取葛野路
從城北來刑大典先在寺侍候二更春祿事來寺中
相見兩君各前後去

廿八日辰時修行由報太政大臣 右大臣 右大臣并

仁座主晚間大政主遣家令大夫存問兼有糧粉等
續有右大臣若右京少進元利萬侶存問又有右大

并主報書 廿九日侍 家令使近晚未來

來正月四日奉見 大政大臣主 右大臣主

十六日召入內對龍眼并將兩部曼荼羅像植着殿上御覽仁座主前在內見次二大臣右大臣右大將宗叡師兄同見曼荼羅其二像便留大政御消曹司了便出內裏更見太政右雨大臣當日歸寺此日兩處施物

十九日從出雲寺發靜法和相共被送於栗田山口逢法明并將唐飯逆共到山階店東頭路南畠畷飯二人從此歸京飯後共詣暉法師行到滋賀栗園相者梵釋寺法大德幽都師等從此更行到弘法寺相者慈教園梨便奉詣大比叡大神宮奉幣帛惣謝入唐初後之事迴弘法寺宿廿日衝雨入寺山至定心院玄奘禪和房

廿日衝雨入寺山至定心院玄奘禪和房

廿一日院無各設飯於客房共食

廿二日雨住

廿三日從中堂起禮拜經藏 文殊堂 法苑三昧及

講堂 戒壇 惣持院 從山王院參淨立院拜謝先

大師靈 次拜謝故別當大德墳 從淨立院過

至西塔肥前講澄愷 和上院 次詣 中

大師墳 後大師墳便遙礼謝 宣公靈故後西塔

大德墳及言謝 秀和上靈 已後至寶幢院拜見

惠高 大德便舉飯後 大德送到講堂法苑三昧

又至愷和上院暫坐喫茶 呈求法錄一遍者過 出院歸

別山王院安置圓敏禪師房

三月一日差人於比叡神宮轉金對經一百餘卷

以前行曆略記如前

天安三年正月廿三日立圓王記

件行曆記之抄似實相房本賴覺書了
于時永養四年六月十九日廿日之間也
本三卷也此以須之也

之山教示之

賴覺

元豐元年六月 九十九日 閱於西川

法印 湖序 湖東宿府 賜御本 馳筆書

之 宛如 一眼 龜值 浮木 孔感 渡

難押者 歟 湖沙門 增觀 記之

已下別紙也 今付之 文治三 十月十五日 智勅記之

我
智隆大師。到墳前

禪林寺

三遍唱名

天台大師墳也

頂拜既畢

更稱釋迦佛号三度礼

次稱大師

号十度頂礼

已上

三遍唱名是誰名字懺思冷之間

中阿含經第卅三於是天王釋及卅三天五結樂子

往詣佛所時天王釋誓首佛足再三自稱名性言唯

大仙人我是天王釋我是天王釋世尊告曰如是

如是物云々

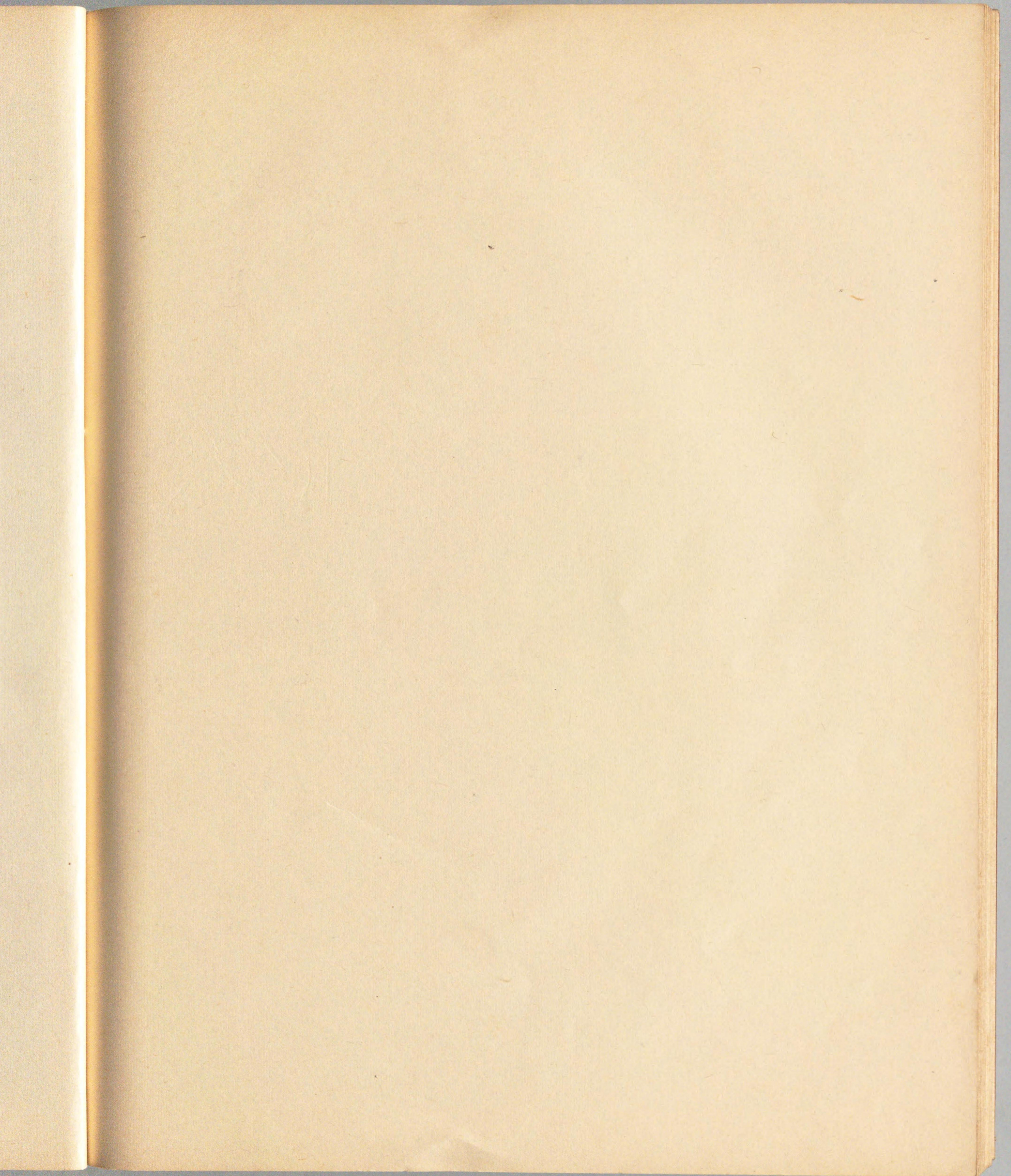
此文豈不堪散累懺業哉

昨亂暇相障不覺返解思其代々

不可賜返抄

七月九日

遠久ハ、丁十月十七日以大寶院大和尚奉奏云、了伴根等、
以返奉被奏云奉也、智勸執云、已上此抄也、



裏

書

複製本第四張表第十行より同張裏三行に至る紙背

複製本第四張表第十行より同張表三行に至る紙背

息田學同僧回載

右可傳燈大法師位

和久在神關勤求聖道音塵渺邈歲月淨陳
余其艱苦有軫冲襟宣假風信於臨行寄寵章
於法慶主者施行
嘉祥三年月日

複製本第八張表第九行紙背

殊欲得東行西遊求學

行動不似此間人莫出行也

此傳語載傳者曰

複製本第九張表第七行第八行紙背

此回全大師來向店家言迄大儀執又削讓寺抄門集
他將被載此事也為原不致

八十字俗

複製本第十張の左端より三寸六分の處より第一張の第一行に至る紙背

第十張の左端より三寸六分の處より第一張の第一行に至る紙背

複製本第十張右端より三寸六分の邊より第十一張裏第一行に至る紙背

此二条内書
此二条内書
此二条内書

此同全大師来白店家百返大儀札又削藤園青沙門一集
給
他抄被載此才也為原了致

和尚遊震旦或相逢天竺三藏教被學志墨并梵志經如
或信過彼斯三藏過遠學諸論伽并經論並皆得手筆

信等也 同前文

已上二条又於宇治平等院書之

永保二年四月一日也

複製本第十二張裏第三行より第六行に至る紙背

藏卷五大小不同卷一依也此記如何
藏卷五

御本无此紙

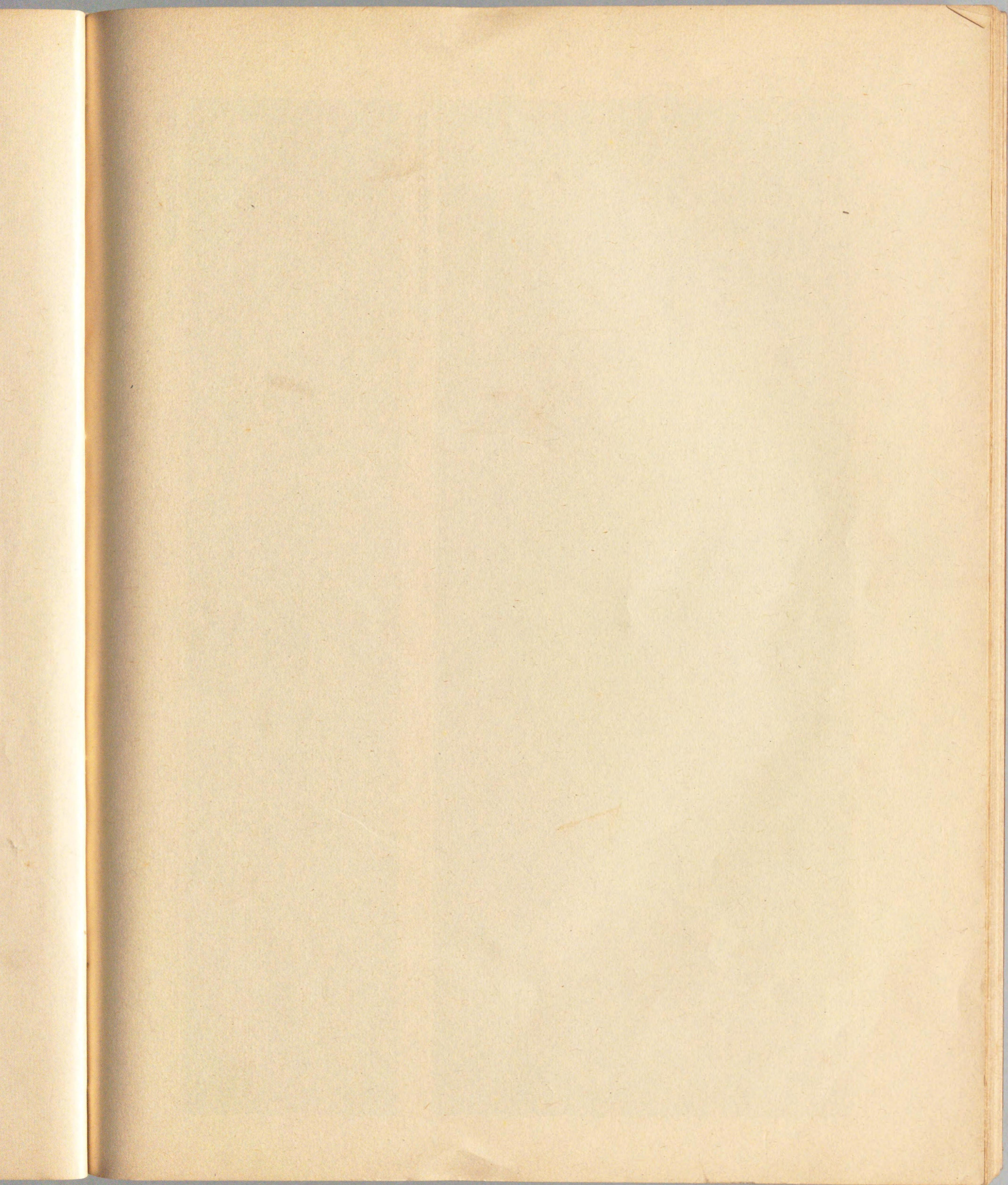
THE UNIVERSITY OF CHICAGO

同十一日重對

書本
以佛名及善名

禮佛有五事功德云。二者好聲

一以好目緣好音聲以見如來形像
二以好目緣好音聲以見如來形像
三以好目緣好音聲以見如來形像
四以好目緣好音聲以見如來形像
五以好目緣好音聲以見如來形像
何令文以



石山寺藏行歴抄解説

行歴抄は、智證大師圓珍が入唐より天安二年歸朝までの行蹟を自記せる行歴記の中より重要な部分を抄出せるものにして、石山寺にその古鈔本を藏し、明治三十六年四月國寶に指定せられたり。

この石山寺藏本は、卷子本一軸にして、高さ九寸六分、牡丹唐草二重蔓の模様ある青地金欄の表紙（幅六寸八分）を着け、端に竹を挟みて緒を附せり。表紙の見返しは全面に金箔を押せる布目紙にして、之に續きて巻頭に黄紙一葉（縦九寸二三分横五寸九分）あり、「四月十九日」云々以下五行の文と「天台大師」以下四行の文とを記せり。この一紙は別紙を加へたるものにして、次張の本文第一紙とは直接に連續せずして、別の紙もて繼ぎ合せたり。本文はすべて十二紙に墨書し（但しその最後の二紙は奥書及び附記の文のみなり）、その第一紙の最初の下方に「石山寺經藏」の朱印あり。本文の料紙は宿紙の如き薄墨色の楮紙にして、高さ凡そ九寸三分、幅は第一紙は一尺五寸五分、他は毎紙一尺六寸乃至一尺六寸一分あり。全巻に裏打を施したるが、裏打の紙は原紙よりも三四分高くして、原紙の下方に（時には上方にも）あらはれ、巻末には原紙の後に約六寸一分の白紙を剩して、その先に牙軸を附けたり。かく裏打を施したるは、比較的新しき時代の事と思はる。

本文は、天地に黒界を劃して書寫せるが（天地の界の間略八寸五分あり）、一紙の行數は必しも一定せず、時に繼目に跨りて書せる處あり。紙背に處々裏書あり、その部分は薄様を以て裏打したれば、大抵讀む事を得。本文全部一筆にして、巻頭の別紙及び裏書の文も亦之と同筆なるが如し。

本書は内題外題共に無けれども、本文の最後に、

以前行曆略記如前

天安三季正月廿三日比丘圓ま記

とあり、之につゞいて、

件行歴記之抄以實相房本頼覺書了

于時永承四季六月十九日廿日之間也

本ハ三卷也此ハ只須ミを抄也

と所 被示之 頼覺

とあれば、圓珍の行歴記の抄出本なる事明かなり。而して、右の奥書は永承四年六月僧頼覺が實相房の本を以て書寫せる時加へたるものなるが、中に難讀の文字ありて十分その意を詳にし難しと雖、本書が三卷の行歴記の中より須要の部分の抄出せるものなるをいへるもの如し（奥書第三行の「須」の下は「要」を誤れるか。又第四行最初の二字は、或は「忝」の一字か）。但し、頼覺がこの時はじめて行歴記より抄出して本書を成せるか、又は頼覺の書寫原本たる實相房本が既に抄出本なりしかは、今明かにし難し。頼覺は藤原頼成（具平親王の男にして藤原伊祐の養子となる）の子にして、出家して永圓（圓城寺長吏。平等院僧正と號す）の弟子となり、乘々房に住す。永承四年三月十九日明尊大僧正より傳法灌頂を受け延久四年五月二日五十三歳にて寂せり（圓城寺傳法血脈及び尊卑分脈による）。されば、頼覺のこの本を抄出書寫せしは、灌頂を受けしより三ヶ月の後にあたる。實相房は、圓城寺の實相房ならむか（寺門傳記補錄第十五、非職高僧略傳卷上、崇壽の條に「本寺實相房初祖也」と見ゆ）、又は園城寺の別院なる山城國北岩倉大雲寺の實相房なるべきか、未だ定め難し。

右の奥書の後に餘白をおきて左の奥書あり。

天養元年六月 九十兩ケ日間於西八條

法印 御房御車宿廊賜御本馳筆書交

之了宛如一眼之龜值浮木孔感涙

難押者歟 求法沙門增觀記之

之によれば、右の行歴抄の寫本の西八條法印の許に傳はれるありて、天養元年六月九十兩日にわたりて僧增觀之を書寫校合したるものなるべし。而してこの處の紙背に存する「同十一日重對校了」の文も、亦恐らくは增觀の記にして、書寫校合の翌日重ねて原寫本と對校したるものなるべし。增觀は右中辨藤原師家（康平元年九月卒）の子にして、眞林房に住し、保元二年十一月二十四日行慶大僧正（園城寺長吏。櫻井僧正と號す）より傳法灌頂を受けたること園城寺傳法血脈に見ゆ。

この奥書の次に

已下別紙也今付之 文治三—十月十五日智觀記之

とありて、「智證大師」以下十二行の文あり。この文は最後に七月九日の日附ありて、行歴抄本文中に見ゆる「三遍唱名」の語につきて、中阿舍經第卅三の文を引きて、その誰の名を唱へたるかを考證して或人に示したる書翰の文と見ゆ。この書翰の文が別紙として添へてありしを、文治三年十月、僧智勸がこゝに書き加へたるものなるべし。この文の後に更に

建久八—丁十月十七日以大寶院大和尚御本交正之了件根本、

以御本被交之本也智勸記之 已上此抄事也

と記せり。智勸は園城寺傳法血脈によれば、眞圓大僧正（園城寺長吏。元久元年五月一日寂年八十八）受法の弟子にして眞林房に住し、文治二年十一月三十日眞圓より灌頂を受けたり。又文治二年十一月、眞圓勅命を蒙りて尊星王法を三井寺にて修せし時、智勸その伴僧の一人として之に列し、又正治二年二月眞圓瑜伽記を談ぜし時、智勸その席に陪せしこと、三井續燈記（卷九、當寺年表上、後鳥羽院及び土御門院の條）に見ゆ。奥書に所謂大寶院大和尚は、即ち眞圓僧正にして（寺門傳記補錄卷第十四に「前大僧正眞圓大寶院眞如院」）とあり、法中補任、園城寺長吏の條にも「眞圓」の傍に「大寶院僧正」と注せり。智勸は、その師眞圓の所藏本を以てこの本に校合を加へたるものなり。而して、その眞圓の本は、或る「御本」を以て校合したるものなりしが如し。

なほ、この本巻頭の別紙に存する二文は、前のものは、「已上傳文也」と注せる如く、三善清行の天台宗延曆寺座主圓珍傳中の一節なるが、その終に「智勸私抄入之」とあり、後のものは、天台大師入寂の年代を示して、圓珍入唐の大中七年がその二百五十七年忌に當る事を明かにし、更にその翌年（日本齊衡元年）より建久五年までの年數を算へて、天台大師の五百九十八年忌に當る事を示せるものにして、その最後に「智勸勘計之」とあれば、共に建久五年頃智勸の書加へたるものなり。又、裏書にも

藏本大小不同ハ五卷一紙也此記如何々々 智勸記之

の如き智勸の書入れなること明なるものあり。其他の裏書の文も智勸の加へたるもの少からざるべし。

かくの如く、この書は、文治三年より建久八年に互りて、智勸が書入を加へ、又眞圓の本によりて校合を施ししものなることは明かなるが、現に存するこの石山寺本は、前述の如く、奥書裏書等をも併せて全部同筆なるべく思はるゝを以て觀れば、以前より存せし寫本に直に智勸が校合書入を加へたるものにあらずして、智勸が新に一本を書寫して、之に追々に校合加筆を施したるものなるべし。さらば、この本は智勸の自筆にあらずして、智勸の校合加筆したりし本を、そのまゝに書寫したるもの

のなるべし。もし智勸の自筆本なりとせば、恐らくは文治三年卷末に別紙の文を書き加へたる時か又はそれ以前の書寫なるべく、もし智勸の手寫ならずとせば、建久八年、智勸が卷尾に奥書を加へたるよりも後の寫本なるべきなり。今之を決定するは困難なれど、卷尾の奥書の文字は、本文書寫後少くとも十年の後に書加へたるものと見むよりは、むしろ本文と同時の筆と見む方自然なるが如く感ぜらるれば、この本は、智勸の自筆本にあらずして、轉寫本とせむ方、眞に近かるべきかと思はる。され、その字體書風等よりすれば、建久を去る事遠からざるものなるべく、鎌倉初期のものなるは疑ふべからず。かくてこの書は、永承四年に書寫せられてより、更に少くとも、天養と文治建久前後との二回の轉寫を経たるものなるべきなり。

この書は前述の如く圓珍の行歴記の抄本なるが、行歴記は、或は三卷と云ひ或は五卷と傳へて、古來の書目に在唐私記五卷或は在唐順禮記五卷といへるもの是なるべく、敬光の智證大師撰述目録には「在唐巡禮記一曰在唐行曆記又稱呼在唐實錄或曰此大師八帙書之一五卷」とありて「續在唐巡禮記三卷」と共に「右皆今存、未上梓、亦爲眞撰」と註せれば、江戸末期までも現存せしもの如くなれど、今その存否を詳にせず。行歴抄は、その抄略本なりと雖、これ亦他に類本なく、しかも鎌倉初期の古鈔本なれば、行歴記の面目を窺ふべきものとして尊重すべし。

行歴記の逸文と認むべきものは、行歴抄の外に全く無きにはあらず。園城寺傳記卷三に「大師御記云」として引用せる「大中九年五月廿五日丁滿入城」以下の文と、同卷四「證大師詣天台唐事」の條に「行曆記云」として引用せる「大中八年智者大師墳唐參」より「不可具記」に至る文とあり。又寺門傳記補錄第十二、大師家傳卷下に「銀地行記」「向花頂記」及び「行歴記」の題下に引用せる文あり。之を行歴抄に比するに、傳記に引用せる文は皆行歴抄に見えて、之より出でたりとも考へられるれど、補録に引用せるものは、各條共に、その大半は行歴抄に一致すれども、また行歴抄に無き文ありて、行歴抄の缺を補ふに足る。されど、その量は甚多しといふべからず。而して、此等の諸書に引ける文の行歴抄に一致せる所を具に比較するに、文字に小異ありて、時に行歴抄の誤脱と認めらるるものもあれど、概して行歴抄の方勝れるもの如し。(猶、行歴抄の裏書中にも圓珍の文と認めらるるものあり。中に行歴記より出でたるものあるべし)

平安朝の初、千里の波濤を凌ぎて唐國に渡りて祕密の教法を學び、その經典法具を我が國に傳へたる高僧はその數少からずと雖、その在唐中の行蹟を詳にし得べきものは甚少く、殊に詳細なる自記の記録の今に存するは慈覺大師の入唐求法巡禮記あるのみ。智證大師(圓珍)に關しては、入唐公驗、台州越州温州等の公驗及び過所、將來目錄等、當時の文書の今に残れるあり、殊に請弘傳眞言止觀兩宗官牒狀の如き、入唐求法の次第を述べてよくその要を得たるものあれども、未だ委曲を悉さざる憾あり。然るに行歴記は、今その完本を得ざれども、その須要を據れる行歴抄の存するありて、温州台州越州の諸州及び長安に於ける求法巡禮の事蹟を、圓珍自身の筆によつて詳にする事を得、且つ當時在唐せし日本留學僧圓載及び圓覺、并に前に入唐せし最澄圓修等の逸事をも知り得るは幸なりといはざるべからず。しかのみならず、この書は、又當時の支那の佛教界乃至一般社會の情勢を知るにも益する所少からず。猶、この本には全文に墨にて句讀を施し訓を附し、處々漢字に聲點をも加へたれば、假名字體字訓字音等の研究にも資すべきなり。

この石山寺藏行歴抄の複本としては、明治三十八年七月及び十月に、東京帝國大學史料編纂掛にて作りし影寫本二種あり。又辻善之助博士所藏の影寫本あり。大正四年にいたりて、高楠順次郎博士これらの影寫本に基づき、更に原本によりて校訂を加へて活版に附し、大日本佛教全書遊方傳叢書第一に收めて刊行せられ、後更に智證大師全集第四にも之を收めたり。この高楠博士校訂本は良書なれども、活版なれば原寫本の面目を窺ふにはあかぬ節多く、原寫本と違へる所あるを免れず。殊に訓は原本に改訂を加へられたるもの少からず。今、石山寺貫主鷲尾僧正の好意により原本の面影を傳へて複製する事を得たるは、本會の慶幸とする所なり。

この本を撮影複製するに當り、紙幅の都合上少しく縮寫し、又卷末の白紙(裏打の紙)の部分は之を省けり。裏書ある處は別に撮影して後に附せり。この本破損少からず、爲に文字の缺け又は失はれたる處あり。然るに前掲の影寫本は、破損今日の如く甚しからざる時の面目を傳へたるものと覺しく、これによりて缺字損字を補ひ得

るものあり。又裏書は裏打の紙の下にあれば、撮影上の困難少からず、爲に原本にては読み得べきを、複製本にては読み難くなれる所あり。今此等を左に録す（「影本」は影寫本、(?)を附せるは、殘畫によりてしか推讀し得るもの、「——なり」とあるは、原本によりてしか読み得るもの）。

複製本第一張表

第一行 「月」の上、影本「四」。「入」の上、影本「遂」

第二行 「四」の上、影本「月廿」。「四」の下、影本「日」。その下、影本「得」

第七行 「王」の下、影本「院」

第九行 「智」の下、影本「勸勘計之六十八」

第一張裏

第一行 初二字、影本「大中」

第五行 「五」の上、影本「此第二百」

第九行 初字、影本「道」

第十一行 「龍興寺」の下、影本「基」。「開」の下、影本「元」。「不」の上、影本「更」

第二張表

第一行 「小湖山」の下、影本「、」。 「脚」の右傍、影本「フモト」あり。

第二張裏

第八行 「行者」の下、影本「陳寶」

第十行 「頂」の下、影本「禮」

第三張表

第一行 「章」の下、影本「關梨相」

第二行 「佐」の下、影本「官」

第七行 「元年」の下、影本「中」。その下「於國清」

第三張裏

第二行 「下馬」の下、影本「下笠」

第三行 「也」の下、影本「珍」

第六行 「今」の下、影本「遇」

第七行 「說濟」の右傍、影本「イフナラク」

第四張表

第一行 「在本」の下、影本「國」

第四張裏

第七行 「多少」の「多」の右傍、影本「イク」

第五張裏

第五行 「求」の下、影本「法」

第六影裏

第二行 「大」の下、影本「師」

第三行 初字、影本「更」

第七張裏

第七行 初字、影本「九」

裏書四

第一行 「御本ニハ」の下は「存」なり

裏書五

第一行 「藏本」の右下、影本「ハ」字あり。「勸」の上、影本「智」。その下は「記」なり。

第二行 「此批」の下は「記也」なり。

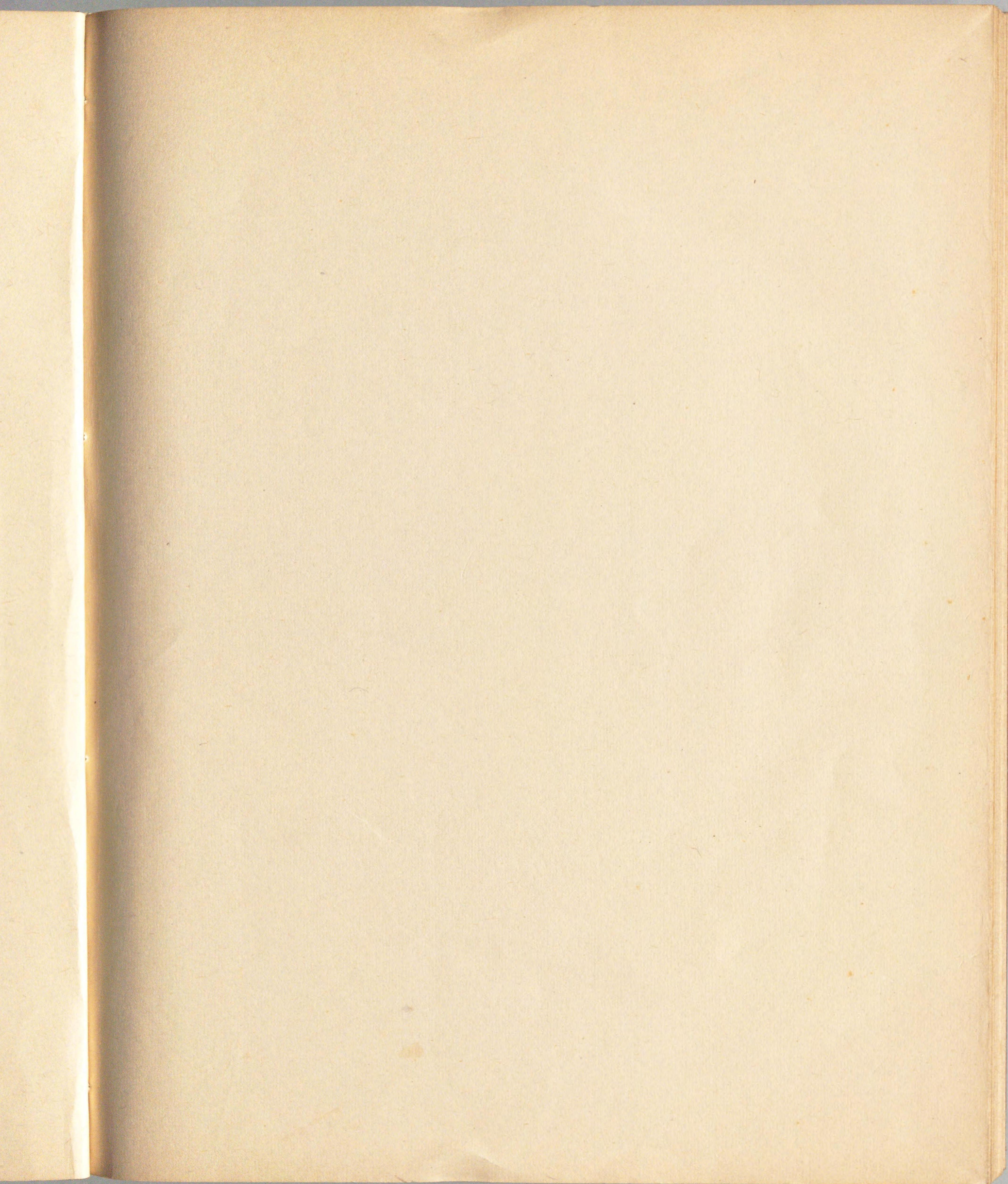
裏書七

第一行 「書本」の下、影本「無」。「後書」の下は「加之」なり。

第三行 「形」の下、影本「像」

第四行 「至」の下、影本「眞」

昭和九年十二月十日



昭和九年十二月廿五日印刷
昭和九年十二月廿八日發行
(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

右代表者

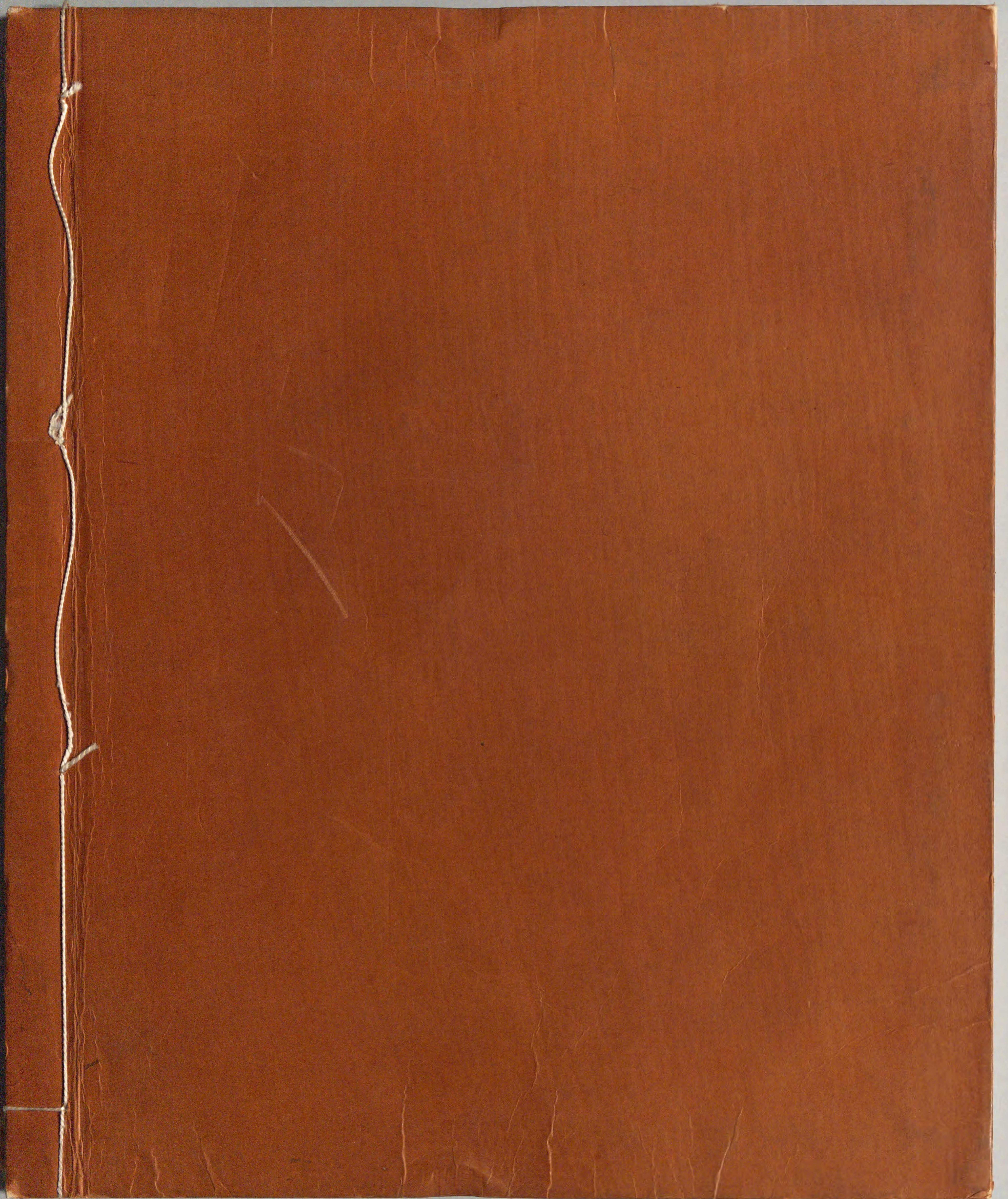
東京市下谷區上野公園地
七條

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町五番地

古典保存會事務所

電話下谷六七七八番
振替口座東京四四九四八番

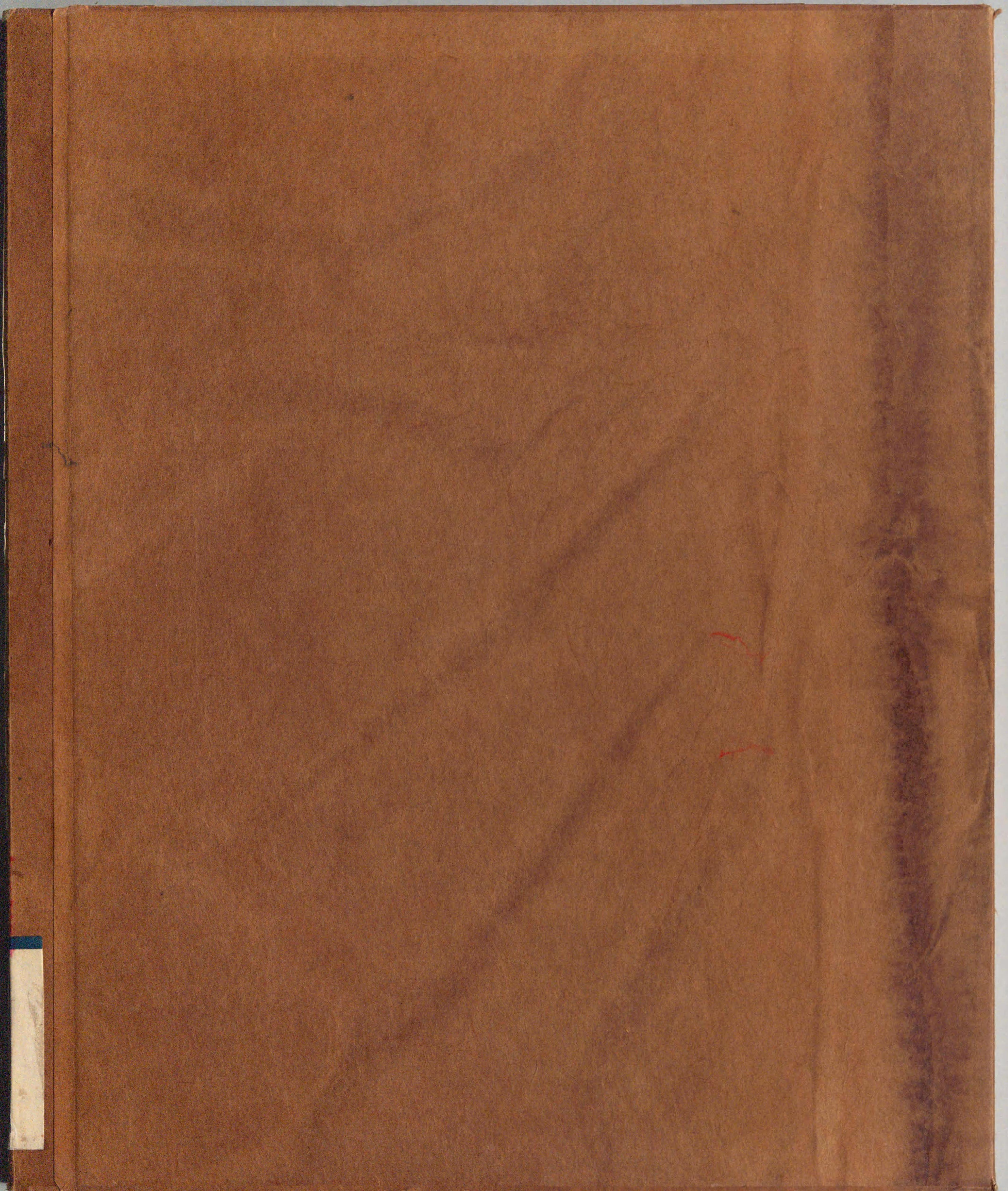


188.4
E83g



00216542

行
歷
抄

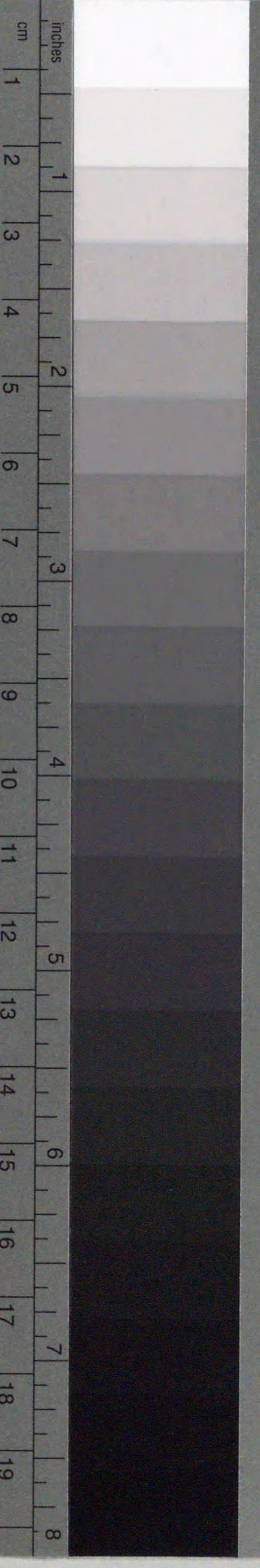


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
0	1	2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	32	33	34	35
36	37	38	39	40	41	42	43	44
45	46	47	48	49	50	51	52	53
54	55	56	57	58	59	60	61	62
63	64	65	66	67	68	69	70	71
72	73	74	75	76	77	78	79	80